



第2回フォーラム様子 ●賛同者一覧
 【私の意見10】立命館民主主義の魅力と基盤—安藤 哲生
 ≪私もひとこと≫ 須田 稔
 第2回フォーラム参加者感想文 ●編集後記

第2回フォーラムも80名で成功し、内容の濃い討議が深まる！

第2回フォーラムは4月12日（土）、衣笠キャンパス至徳館（旧中川会館）において、教職員組合との共催で合計80名の参加を得て成功しました。

冒頭、教職員組合連合佐藤春吉委員長から開会挨拶があり、「考える会」の活動が教職員を励ましていること、他方、業務協議会に応じない、「考える会」に会場を貸すなどという圧力等、最近の学園トップの動きを含む学内状況を説明されました。

新学期開始まもない時期ということもあって、諸業務と重なった現役教職員の参加は前回を下回りましたが、顧問の岩井忠熊・戸木田嘉久両先生を含む元教職員、学生、その他一般の参加者はほぼ前回通りでした。しかし、今回初めて参加した人が31名を占めるなど運動の広がりを示すものとなりました。

当日はメインテーマの“立命館の「これまで」と「これから」—教育研究と組織運営—”に則して、「学園トップ」のありようや「トップダウン」の具体的事例、学生への教育を巡って、問題提起者とフロアの参加者との間で熱い議論が交わされました。フォーラムでの問題提起、討議の詳細は、「報告集」として後日に発行しますので、ご期待下さい。

終了後、末川記念会館地階カラムでの恒例の懇親会も、参加者の半数が参加して和やかに行われました。時間がなくてフォーラム会場で発言できなかった学生、初参加者が次々に発言し、予定された時間もアット言う間に過ぎ、次回フォーラムでの再会を誓って散会しました。

なお、「考える会」の活動（郵送代、報告集の印刷代等）を支えるカンパの訴えに対し、当日も88,000円が寄せられました。本当にありがとうございました。

※※当日のフォーラム資料をご希望の方は、事務局（組合書記局）までご連絡下さい。※※

賛同者(50音順)

[2008年4月24日現在]

朝日 稔、芦田 文夫、**荒井 正治**、荒川 重勝、安藤 哲生、井川 定雄、石田 昌幸、石飛 幸子、伊藤 堅二、伊藤 武夫、井上 純一、岩井 忠熊、梅田 四郎、岡尾 恵市、奥地 正、奥村 功、小野 一郎、恩田 良昭、笥 文生、香積 学、加藤 直樹、川上 勉、菊井 禮次、栗山 崇、桑原 博昭、小檜山 政克、小村 英一、坂田 典子、坂野 光俊、阪本 欣三郎、佐々木 嬉代三、佐藤 嘉一、杉野 圀明、**島貫 志津江**、須田 稔、園田 充則、**代田純**、高内 俊一、高木 彰、高橋 悠、田坂 和美、田中 宏道、辻村 寛、津田 孝司、堤 矩之、戸木田 嘉久、友藤 信明、**中谷 猛**、**中谷 義和**、中村 泰行、中山 康之、永原 誠、夏原 嘉弘、浪江 巖、廣末 良子、藤原 莊介、二場 邦彦、松田 全功、南 直樹、**三木 照雄**、宮澤 正男、**三代澤 経人**、三好 正巳、森野 勝好、山口 幸二、**山崎 信三**、山下 弘、山辺 昌彦、山本 岩夫、**山田 潤子**、角 正子、若井 勉、和田 武

※太字は、NEWS6号以降に賛同者になられた方です。 賛同者合計数：93名（匿名20名含む）

【私の意見 10】

立命館民主主義の魅力と基盤

安藤 哲生（05年定年退職、特別任用教授）

私は、05年に定年を迎え、現在特別任用教授として経営学部とMOT大学院(テクノロジー・マネジメント研究科)で教えています。民間企業に32年勤務し、94年に本学に移籍して以来14年たっていますが、いまだに当時の爽やかな開放感と、緊張感を忘れることはありません。

利益追求を旨とするピラミッド組織で仕事を経験してきた者にとって、職位に関係なく意見を述べあい協働して問題に取り組む、まさにフラットな本学教職員の仕事ぶりは驚きでもあり、新鮮なものでもありました。事務処理の中には民間企業では考えられない非効率が見られ、冗長な議論が続く会議が多いにも拘わらず、結果として着実に成果を上げている組織活動の原動力は何なのか。

私自身もその渦の中に巻き込まれ、大学運営の一端を担う経験をしましたが、学内で繰り返し述べられてきた3つのキーワードは、やはり重要な役割を果たしてきたと思います。

第1は、「教学優先」という原則が人々の口から明確に述べられ、教育機関として学生の目線を絶えず意識した行動がとられていたということです。教学優先に相対する言葉は、財政優先であり行政優先であろうかと思えます。

民間企業にも当然予算制度はありますが、それは自分の支配の及ばない顧客という厳しい外部の力によって実行が左右される世界です。収入の大半を授業料によって約束され、支出権限の比重が大きい学園とは大きく違います。学園組織は、単年度予算制度のもとで、ともすれば官庁同様に予算付与の権限によって、教学の内容あるいはその担い手を支配する構造に陥りやすい組織です。それにも拘わらず、本学は「教学優先」の原則を強調することによって正しい姿を維持してこられた、と考えられます。

第2は、「全構成員自治」という概念が制度的に整えられ、実行されていたことです。教授会、全学協議会をはじめとする各種機関の議論は一

見無駄が多く、一つの事柄を決めるのに多くの時間とエネルギーを要します。民間企業において迅速な意思決定を旨としてきた私にとっては、当初最も違和感を覚える事柄でした。(民間企業から転職した新しい職員も今それを感じ、この変更が組織改革だと誤解しているかもしれません)

しかし、ある時これが組織構成員の多様な考えをエネルギーに変える仕組みであることに気づきました。それだけでなく多様な考えを持つ若者を包み込んでいく教育機関が、構成員の多様性を認めなくしてなんとしようか。全構成員自治とは、そのような視点が具現化したものと理解しました。各機関、特に学園運営とは異なる視点を持つ教職員組合、学生自治会の忌憚ない意見を受け止めてこそ全構成員自治は実態を伴うこととなります。



しかしその理想を実現するためには、指導的役割を果たし批判の矢面に立つ者に、排除の行動ではなく、異なる意見の存在を尊重する民主主義の基本的理解と、包容力を求めることとなり、指導者の選任制度が一層重要となります。

第3に、「教職協働」の言葉に象徴されるように、教職員各々の役割が尊重されていたことです。専門性の確保には不断の努力が必要であることはもちろんで、大学である以上教員の専門研究分野での役割は特に重要視されます。そして職員も教育機関固有の専門的見識・知識が求められ、永年の職務実績を踏まえて学生の視点を理解した上で、それに応える職員が存在が、大学改革の過程で重要な役割を果たしたと認識しています。

大学改革の中心にあった前専務理事は、「トッ

プダウン・アンド・ボトムアップ型の全教職員参画が立命館方式」と述べていますが、教職員がこのような方式を受け入れた背景には、人々の経済的期待があったことも当然考えなければなりません。本学の賃金水準は他大学に比較して決して高いものではないにも拘わらず、教職員が改革に積極的に取り組んでいることに他大学関係者から驚嘆の声が上がっていたことも間違いありません。改革の成果がいずれは自分にも与えられる、と考えるのは当然のことであったと言えます。そのような組織への信頼なくして人は前向きに動くものでないことは社会の常識と言えます。(成果の見返りが、よもや教職員の賃金カットとトップの退職金倍増という歪んだ形で現れようとは、当時誰一人として想像できなかったでしょう)

以上ここ数年前までの本学発展のなかで「教学優先」「全構成員自治」「教職協働」が果たした意味を、私なりに考えてみました。そしていまこれらの役割がどのように認識され、あるいは無視されているのか、キャンパスに席を置きながらも立場上私には判らないことが多々あります。ただ現職の人達との交流の中で、今まで本学発展の基盤となっていた教職員の役割に対する正当な評価が失われ、立命館民主主義が形骸化しつつあるのではないかという疑問、危惧は感じざるを得ません。

民主主義は不断の努力によってのみ護られると言われます。先達の永い苦闘の中で作り上げられてきた立命館民主主義の基盤が、責任・権限一体となった組織運営によって護られ本学が質的にも一層発展することを期待したいと思います。

《私もひとこと》 -----偽善的な呼び名に変えて

欺瞞と冷酷を隠蔽する このアグドサ----- 須田 稔

後 後半生といっても 残るは5年くらいだろう
 期 期限は七十五歳にして その先のケアはホドホドでいい
 高 高度の医療も介護も 「枯れ木に水」で税金のムダ遣い
 齢 齢を重ねれば 脳から足まで凋落と衰弱の一途
 者 者と オカミに恭順していればいいのだ
 医 医者は 復元力のある健康体だけケアすればよい
 療 療護は 家族の責任 傷病は本人の自己責任
 制 制裁したいのだ 役立たずの弱者と負け犬を
 度 度胸があり戦場に馳せ参じる 淫瀾の「臣民」を優遇したい

自由市場経済主義 つまりは競争と成果にだけ人生の価値はありと信奉する政治と 日米軍事同盟の強化こそが国際貢献の道と妄信する時代遅れの外交とで 喜寿 傘寿 卒寿 白寿と 長寿を祝ってきた「この国の伝統と文化」は 無残に蹂躪されて 「長寿」の「チョウ」は 「嘲笑」の「チョウ」となり 「懲罰」の「チョウ」となり 「弔影」の「チョウ」となる

【第2回フォーラム参加者——感想文】

《学生・匿名希望》

今回初めての参加でしたが、参加されている教職員の熱意に驚かされると同時に、問題の深刻さを実感しました。私は学友会で活動していますが、学生参加の全構成員自治というものが軽視されていると考えます。

今年、学友会の代表が毎年行っている卒業式と、入学式でのあいさつをなくすことを一方的に告げられてしまいました。今後、民主的な協議がどうなるものかと危機を感じる事態でした。これを受け、学友会でもこのような場に参加していくことが重要であると議論しています。よければ、今後学園運営における学生参画の過去、現在、未来というテーマで学習等して頂ければと思います。

《ベテラン職員・匿名希望》

立命館学園の改革を支えてきたのは、一つは「理念」「アイデンティティ」の全学園構成員による共有であった。これは「くどい」程徹底した「平和と民主主義」という教学理念の共有が、力を統一させてきた。二つ目は「教職協働」。安物のトップダウンでは駄目。大学アドミニストレータの養成も片手落。若干職員（教員も）の成長は、現場で教職が協働し、教育や様々な改革への課題に取り組んで行くことによって、成し得ていく。現場が育てて行く。三つ目は「学生の視点」「学生の為に」という基本的考え方。全学協に対する変質化の策動や、学生自治会に対する圧力は、かつての改革を支えてきた「立命館方式」を自己否定するもの。学園の真の改革のサスティナビリティを担保するものは、その様な事ではないか。最近の「トップ層」の動きは、真の改革の力を壊すものであろう。また若干教職員の成長の芽をつみ取るものであろう。真の改革のサスティナビリティを目指し、原点を再確認したい。

【編集後記】

第二回フォーラムの課題整理を、とっていた矢先、「新入生特別転籍」のニュースが飛びこんできた。このニュースが、学生や父母、校友さらには立命館の校風や教学に様々な期待・希望を寄せていた人たちの胸を萎ませることになったであろうことは、容易に推測できる。その責任は重い。

報道されている「検証委員会」に任せるだけでなく、教授会や職場、組合など、それぞれの位置から早急にこの問題の根源を検討しつくして欲しいと願うのは編集子だけではないだろう。

編集子としては、この問題の社会的批判から二つのことに気づかされた。一つは教育機関としての大学は社会的公平性を失うことがあってはならないということ、二つには経営体としての大学でのコンプライアンスの徹底である。おそらくこの両者は相互に関係しているだろう。社会的公平性を失念すれば、法の精神を忘れて法の隙間を狙うことになるし、コンプライアンス、それも法の精神を忘れれば、社会的公平性の意識は上ってこない。

今次の問題に即して考えれば、入学者選抜の社会的公平性の遵守と私学助成に関わるコンプライアンスである。そのことは、特別転籍受け入れ決定過程での学部教授会と常任理事会の関係（特別転籍＝入学という教授会の最重要な議決・承認が常任理事会より後にされたという問題）や、入学者選抜方法の構造(志願者数のみに固執しがちな多様な入試における選抜の公平性や適切性の検証)、ひいてはそもそも入学定員を大きく上回る「予算定員」確保の考え方にまでメスを入れる必要があるだろう。

こうした眼でみると、同じようなほころびの糸が、学園内でのいろんな問題につながっているのではないだろうか。今回の問題は、その発端が90年代にさかのぼるという意味でも立命館大学がおこなってきた「大学改革」の一つの結果の現われでもある。その意味では従来の大学改革そのもののあり様が問われているとも言えよう。「大学改革のトップランナー」を自負してきたのだから、学園はそこまで踏み込む度量があるはずだ。それこそ「平和と民主主義」を教学理念とする立命館大学の矜持であるだろう。(I&M)

事務局連絡先：〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学教職員組合 気付
「立命館の民主主義を考える会（元教職員）」

TEL:075-465-8200（宮澤気付） FAX:075-465-8201

メールアドレス rits.democracy@gmail.com

ホームページアドレス <http://rits-democracy.blogspot.com/>